

フィールド風

(現場)からの風

宮田守男

4月、長野県に地球温暖化による気候変動の被害を軽減する「適応策」の推進拠点として「信州気候変動適応センター」が設置され

た。気温上昇による災害や農業などへの影響を予測して市町村や企業に情報を提供し、具体策の検討を支援するのが目的だ。5月には、北海道のオホーツク海側の佐呂間町で、5月に観測史上初めて35度以上の猛暑日に。長野県内でも各地で5月の最高気温を更新した。今年も猛暑かと心配したが、テレビ解説での気象予報士は、1993年の状況に似ていて、その時の日本は、夏の深刻な冷害と台風

の相次ぐ襲来で、大凶作となり、コメを外国から緊急輸入したと問題提起した。

この平成の大凶作は、長雨・日照不足・低温・台風などの異常気象で、いもち病が大発生し被害を受けた農家もあったが、同じ作況指数の地域でも、田圃で差があり、異常気象が不作の全ての原因

り、今後の対応に注目して行きたい。昨年の災害レベル級の猛暑で話題となった環境省が作成した「2100年未来の天気予報」。高知県四万十市で44・9度、名古屋で43・9度、東京で43・6度を記録。熱中症で病院に搬送される人は、全国で12万人に上るとした。さらに、局地的に1時間に100mmを超える猛烈な雨が降り、河川の氾濫や土石流が発生、一方で雨が降らず、干ばつで

農作物が枯れる被害も。最大瞬間風速90kmという竜巻のような風を吹かせる台風の出現も予想。異常気象は地球温暖化の影響。対策をしなければ21世紀末には地球の気温が現在より最大4・8度上昇すると「今そこにある危機と認識すべき」と各紙が情報発信した。未来の話ではない、昨年東京に近い熊谷の気温が41・1度、史上最高を記録、命に関わる危険な猛暑は日本だけでなく世界気象機関

は、世界各地で異常気象が起き、これに加えて予報官が「こんな動きは見ることが無い」と驚いた台風の出現。今年5月には屋久島で50年に1度の豪雨で、

農業の未来に影をおとす異常気象

高齢化・輸入圧力・異常気象などにより、荒廃する農地の増加が止まらない
.....
複数箇所で土砂崩れが発生、多くの観光客が孤立した。温暖化への取組を、今以上に実行すること一人ひとりが認識するべきだろう。
(NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上)



以上